信州大学 SHINSHU UNIVERSITY | 教育学部 附属長野小学校

３年２組

もなと一緒に幸せになりたい
～毛刈りそして羊毛からもなを感じる～

もなと共に恐怖に立ち向かう子どもたち

５月23日に、3年2組で飼育している羊のもなの毛刈りを行いました。コリデールは、羊毛をたくさんとることができるように、季節が変わっても毛が抜け落ちないよう改良された品種です。そのため、夏になると暑さで死んでしまったり、自分の毛の重さでけがをしたりすることがあります。もなが幸せに長生きするためにも、毛刈りは欠かせないのです。当日は繊維学部の大室農場から、M先生とS先生にお越しいただきました。Aさんは、休み時間から職員駐車場で先生方が到着するのを待っていました。「あの車かな、違った」と、学校の前の道を通り過ぎるたびにそわそわしていました。先生方が到着すると、バリカンを見せていただきました。スイッチを入れると大きな音が鳴ります。その音を聞いて逃げようとしたもなを見て、Aさんは「こわい、こわいねもなちゃん」と優しく声をかけました。そして、いよいよ毛刈りのスタートです。もなの毛が刈られていくのを見たBさんは、奥歯をぐっと噛みしめながら、もなの怖さを身体で感じているようでした。Cさんは「僕はもなちゃんのこと見られない、怖い」と言い、目を背けていました。Aさんは、じっと毛が刈られていく様子を見ていました。わきの下の毛を刈るときには、S先生がもなをバンザイさせました。思わず「うわあ」「かわいい」と騒ぐ子どもたち。それを見たAさんは「静かにして、ストレスになっちゃうよ」と伝えました。今までおとなしく毛刈りをされていたもなですが、頭の毛を刈るときは暴れ出しました。M先生もなかなか毛を刈ることができません。それを見たAさんは、胸の前で両手を合わせながら「暴れないで。傷ついちゃうからね。自分で傷ついちゃうからね」と言い祈るのでした。毛刈りも終盤となるとAさんは配合飼料を柄杓いっぱいに入れてきました。そして「ご褒美は大盛りじゃないとね」と言い、もなに配合飼料が見られないようにしながら、毛刈りが終わるのをずっと待っていました。毛刈りが終わると「よく頑張ったね」と言って大盛りの配合飼料を食べる姿を笑顔で見つめていました。

もなにとっての初めての毛刈り。Aさんは毛を刈られているもなの気もちに寄り添いながら、頑張っているもなに対して自分ができることを考え行動していました。朝早く来て真っ先にえさをあげていたAさん。もなが食べていたタンポポやクローバーを「おいしいのかな」と言い食べていたAさん。もなと同じ目線に立って自然体験園を見つめていたAさん。もなに心を寄せ続けてきたAさんだからこそ、もなの怖さやストレスを自分のことのように感じていたのだと思います。そして、山盛りの配合飼料を食べているもなに「よく頑張ったね」と声をかけている姿は、もなだけでなく自分自身にも言い聞かせているように見えました。もなに心を寄せながら暮らしてきた子どもたちだからこそ、もなを感じられるからだになっています。

羊毛からもなを感じる

５月のもなの毛刈りでは、たくさんの羊毛をもなからいただきました。その羊毛を何に使うかを話し合ったところ、D

さんやEさんからは「自分たちの思い出になるもの」、FさんやGさんからは「もなを幸せにするもの」にしていきたいという声が上がりました。そこで、まずはもなの羊毛を使える羊毛にするために、羊毛洗いに挑戦しました。

はじめに、スカーティングを行いました。スカーティングとは、フンや汚れ、ゴミがついた羊毛を取り除く作業です。スカーティングがどれだけ丁寧にされているかで羊毛の質が変わると言われているほど大切な作業です。Hさんは、羊毛に挟まったチモシーや配合飼料を取りながら「もなちゃんよく体にチモシーつけてたよね。配合飼料はみんながふざけて背中に乗せた時のやつかな。かわいそうだったな」と言いました。Gさんは「これはおしりの毛だな。フンがたくさんついている」とつぶやきながら、汚れた毛ときれいな毛を仕分けていました。Iさんは「本当に汚れている所だけ切り落とせばもったいなくない」と言い、はさみを取り出して汚れている羊毛だけを切り取っていました。できるだけ無駄のないように、羊毛の仕分けをしていきました。

続いて予洗いをしました。約60℃のお湯に羊毛をつけ、羊毛についていた油を落としていきます。温度を測るために、温度計の学習をし、予洗いのためのお湯を沸かしました。そして、出来上がったお湯に羊毛を入れました。10分ほどお湯につけた羊毛を持ち上げると、鍋の中のお湯が茶色に汚れていました。Jさんは「こんなに汚れていたんだ。もなちゃんよく地面で寝てたもん」と話していました。

予洗いが終わると、洗剤を入れて本洗いをしました。本洗いは、手でやさしく押し洗いをします。初めはビニール手袋をつけて洗っていた子どもたちもいましたが、汚れが落ちて、だんだん白くなっていく羊毛を見て、素手で洗い出す子どもたちも増えていきました。「やわらかい」「指で洗った方が細かいところまで洗えるよ」と言った言葉から、その姿は広がっていきました。羊毛は強くこするとフェルト化してしまい固まってしまいます。Kさんは、ごしごしと洗いたい気持ちを抑えながら、優しく弱い力で洗っていました。

最後にすすぎ洗いをして、乾燥させました。羊毛を取り出すと、子どもたちは羊毛をほぐしながら広げ始めました。Lさんは固まってしまった羊毛を見て「もったいない」と言いながら、絡まった繊維を爪で丁寧にほぐしていきました。

そして、乾燥した羊毛を手に取りながら、この羊毛をどのように使っていくか話し合いました。羊毛を洗う前は「売りたい」と言っていたMさん。羊毛を洗い終えた後は「絶対に売らない。余ったものも、集めれば何かに使える。もなの体の一部だから、俺たちで大事に使いたい」と語りました。

「もなちゃんよく体にチモシーつけてたよね。配合飼料はみんながふざけて背中に乗せた時のやつかな。かわいそうだったな」「これはおしりの毛だな。フンがたくさんついている」「こんなに汚れていたんだ。もなちゃんよく地面で寝てたもん」という言葉。子どもたちは、羊毛からもなを感じていました。もなから刈り取られた羊毛は、傍から見れば「汚い」と思わざるを得ないくらい汚れた羊毛です。しかし、もなと1年間共に暮らしてきた子どもたちだからこそ、目の前にある羊毛から、もなが辿ってきたストーリーを想像することができたのだと思います。Mさんが「（羊毛は）もなの体の一部だから（絶対に売らない）」と語ったのも、羊毛からもなを感じ、愛着を感じたからではないでしょうか。世界で一匹のわたしたちのもなを感じる羊毛。子どもたちは、どのように活用し、その中で何を感じていくのでしょうか。子どもたちと羊毛を見つめていくこれからが楽しみです。